

「読書人カレッジ」にご招待

東洋英和女学院大学ではこの春に続き、秋と冬にも「読書人カレッジ」を開講します。

高校までの勉強とは違って、「大学での学び」には「本を読むこと」が欠かせません。その理由は、課題やレポートのために必要だから、というだけではありません。「大学での学び」の目的が、知識だけではなく知性も身につけることにあるから——言い換えれば、「思考する力」を養い「自分の人生を自分で切り拓いていく力」を身につけることにあるから——なのです。

とはいえ、「どんな本を読めばいいの?」「どうしたら上手に本を選べるの?」といった疑問は、誰もがもっていることと思います。そこで本学では、日本有数の書評紙『週刊読書人』の企画「読書人カレッジ」（日本財団との共催）に参画し、「本を読むこと」について深い経験のある講師の方々をお招きして、本学学生の素朴な疑問に答えていただき、アドバイスをしてもらうことにしました。

「読書人カレッジ」は本学学生を対象として、授業の一環として開講されますが、本学に合格した皆さんにも参加してもらえよう、特別にご招待することになりました。Zoomでの開催ですが、大学の授業の雰囲気も味わってもらえると幸いです。皆さんの参加をお待ちしています。

※合格者の皆さんへは、web 出願サイトのマイページで
「合格おめでとうございます」ボタンを押すとアドレスが表示されます。

第3回「読書人カレッジ」

日時 1月12日(金) 16時30分から18時

講師 小山内 園子 さん (翻訳家)

1969年生まれ。東北大学教育学部卒業。NHK 報道局ディレクターを経て、延世大学などで韓国語を学ぶ。訳書に、カン・ファギル『大仏ホテルの幽霊』（白水社）、『大丈夫な人』（白水社）、『別の人』

(エトセトラブックス)、キム・ホンビ『多情所感』（白水社）、『女の答えはピッチにある——女子サッカーが私に教えてくれたこと』（白水社）でサッカー本大賞受賞、チョン・ソント『遠足』（クオン）、ク・ビョンモ『破果』（岩波書店）、『四隣人の食卓』（書肆侃侃房)、など。共訳書に、イ・ミンギョン『私たちにはことばが必要だ』『失われた賃金を求めて』『脱コルセット:到来した想像』（タバブックス）、チョ・ナムジュ『彼女の名前は』（筑摩書房）、『私たちが記したもの』（筑摩書房)など。

キム・ホンビ『多情所感——やさしさが置き去りにされた時代に』（白水社、2023年）。

ク・ビョンモ『破果』（岩波書店、2022年）。

イ・ヒョン『ペイント』（イースト・プレス、2021年）。

イ・ミンギョン『失われた賃金を求めて』（共訳、タバブックス、2021年）

カン・ファギル『別の人』（エトセトラブックス、2021年）。

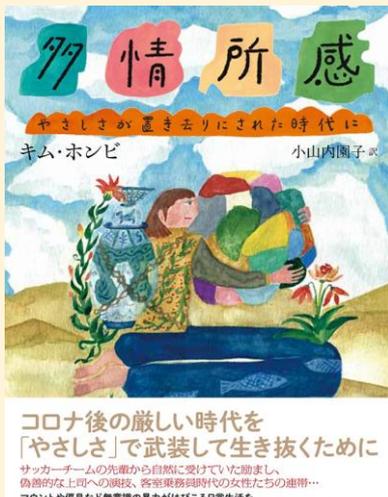
キム・ジナ『私は自分のパイを求めるだけであって人類を救いにきたわけじゃない』（共訳、祥伝社、2021年）

チョ・ナムジュ『彼女の名前は』（共訳、筑摩書房、2020年）。

キム・シンフェ『ぼのぼのみたいに生きられたらいいのに』（竹書房、2018年）。

チョン・ソント『遠足』（クオン、2018年）。

姜仁淑『韓国の自然主義文学——韓日仏の比較研究から』（クオン、2017年）。



☆終了しました☆第2回「読書人カレッジ」

日時 11月6日(月) 16時30分から18時

講師 綿井 健陽 さん (ジャーナリスト、映画監督)

イラク戦争を現地で取材し、2003年に「ボーン・上田記念国際記者賞 特別賞」「ギャラクシー賞 報道活動部門 優秀賞」を受賞。2005年にはドキュメンタリー映画『Little Birds——イラク戦火の家族たち』で「ロカルノ国際映画祭 人権部門 最優秀賞」「JCJ(日本ジャーナリスト会議)大賞」「韓国EBS国際ドキュメンタリー映画祭 スピリットアワード」「毎日映画コンクール ドキュメンタリー映画賞」を受賞。10年後に再び現地を訪れ、『イラク——チグリスに浮かぶ平和』を制作し、「FIPA(国際テレビ映像フェスティバル)特別賞」を受賞。その他にも、スリランカ民族紛争、パプアニューギニア津波被害、スーダン飢餓、東ティモール独立紛争、インドネシア紛争、アフガニスタン侵攻、光市母子殺害事件などの取材・報道で知られ、ウクライナ戦争も現地から取材・報道を行っている。著書に『リトルバーズ——戦火のバグダッドから』(2005年、晶文社)、『フォトジャーナリスト13人の眼』(共著、集英社新書、2005年)、『ジャーナリストはなぜ「戦場」へ行くのか』(共著、集英社新書、2015年)など。

